

“すばらしい子供たち”を撮影して

かつてアメリカの大統領選でルーズベルトに破れたウエーデルウィルキー氏が、選挙後世界を旅行して“ワン ワールド”という言葉を残されたことがあります。私は子どもの世界こそ“ワン ワールド”であると思います。彼らはすぐ友だちになることができます、そして皆遊びの天才です。どんな状態にあっても遊ぶことを忘れません。働いていても、教室の中でも、ちょっとした物、ちょっとした時間を利用して遊びに発展させてしまいます。遊びに没入した子どもたちの姿は真摯な一途すがあります。

私に世界の子どもたちを撮影しようと思いたたせたのは、パリ郊外にあるブローニュの森で遊ぶ子どもたちでした。私はビクニックに来ている子どもたちをカメラで追っているうちに、いつしか彼らの世界に吸い込まれてしまったのです。それは私に忘れていた子ども心を思い出させてくれたに違いありません。

田 沼 武 能

——この大人にない無限な可能性、美しい生命を持つ子どもたちを画にしよう——

あれから十年いろいろな国の子どもに会うことができました。中国の上海で母親に散髪してもらっていた少女、エクアドルの山奥で会った少女、ソ連のサーカス学校の生徒、リオのカーニバルで踊っていた子どもたち、一人一人の顔が楽しい思い出が甦よみがえってきます。中でも強烈な印象を受けたのがペルーの奥地マチュピチュに行く汽車に乗った時のことでした。

途中の駅に列車が着くと、子どもたちが群がってきて、小さな手をさしだすのです。乗客の誰かが、小銭こぜにを投げると、その小さな手の波は、どっと崩れて、われ先に小銭こぜにを拾おうとするのです。

私は大人であることの恥ずかしさと、いたたまれぬ怒りに

かられました。

もう三十年も前になります。青年であった私は、焼けくずれた東京の街を歩いていました。進駐軍のG Iが、いたる所にいました。

そして、G Iの姿をみると、

「ギブミー、ギブミー」

と手を出す幼い同胞がいました、もし、封の切られていないガムなどをもらえば、それはすぐ、ヤミ市の商品となっていたのです。私はその終戦当時のことを思い出し、複雑な気持ちになりました。

子どもにとって豊かな遊びとはなんでしょう。

オモチャがたくさんあることでも、人形がたくさんあることでもないのです。豊かな自然の中で遊ぶことだと思いません。フィジィで会った子どもたちは木のぼりをして遊んでいました。彼らは木のぼりに飽きると、下に流れる川に飛び込み、今度は水泳をして遊んでいました。ロンドンにもパリーにも広い公園があり、自然の中で遊べるようになっていきます。私はある日、ロンドンの街なかで遊ぶ子どもを撮影しようと思ひ出かけました、一日中歩いて二組の子どもしか会う

ことができませんでした。

近ごろの日本には「大人こども」ばかりで、わんぱく坊主がいなくなったといわれます。オーストラリアで、ある商社マンを訪ねたとき、わたしと同年輩のその父親は、

「坊主が、こちらへ来てから、子どもらしくなった。この広大な自然と、受験戦争から解放されて、彼の性格形成にいい影響を与えているのかもしれない。しかし、あまり長いこと、こちらにいると、今度は日本へ帰ったとき、それだけ立ちおかれてしまうのではないかと思うと、全くわからなくなる」

といていたのを思い出します。

私は南ベトナムには一日半しかいることができませんでしたが、その短かい時間にサイゴン郊外で五つの交通事故を見ました。そして十指に余る葬儀のトラックに会いました。彼らは、それほど驚いたようすも見せません。南ベトナムでは戦争が始まって三十五年になります。生まれた時から大砲の音を聞き、やがて戦場になり出され、運の悪い者は戦死してしまふ。戦争とともに生活をしており、死に対して慢性になっ

てしまったのです。恐ろしいことです。そして私の訪れた孤児院には、たくさんの両親を失った本当に不幸な子どもたちが収容されていました。この不幸な状態を誰が止めるのでしょうか。大人の勇気ある決断しれないと思います。この地球から戦争をなくし、美しい地球にして、この子どもたちにバトンタッチすることが私たち大人の責任ではないでしょうか、この十年間「すばらしい子どもたち」の撮影をして痛切に感じました。

(写真家)

☆ 著者紹介

たぬま・たけよし氏は一九二九年東京生まれ。東京写真工業専門学校卒業後、木村伊兵衛氏に師事、サンニュース・フォト社に入社、報道写真家として活躍。一九六五年からタイムライフ社と契約、世界各地を取材した。

著書「武蔵野」など。(写真集「すばらしい子供たち」朝日新聞社発行 二、九〇〇円 より)

今年の一月、この「すばらしい子供たち」写真展があることを、私は新聞やテレビで知りました。そしてぜひ実物を見たいとこの会場に行きました。予想通りすばらしい写真ばかりで、私は何度も会場を歩きつ戻りつしました。色の美しさはもちろん、写真の中の子どもたちが実に生き生きと、ほんとうの子どもなのです。こんな子どもの姿をとらえることのできる方はきっと、子どもの心のわかる、子どもの好きな方に違いない、と私は思いました。たまたま幸運にもその日は、田沼氏が本人が会場にいらして、写真集を買った人にはサインをしてくださるといいます。私は、この日の記念に一冊を買い、サインをしていただくべく列に並びました。待っている間に私はただサインだけでなく、何か書いていただきたいな、と考えました。そして私の番がきた時、

「子どもであったことを忘れないために」と書いてください
い」

といいました。その方はちょっと私の顔を見てから、筆をとって特色のある字で、すみ黒々と書いてくださいました。

その日、帰ってから写真集のあとがきを読みます。お願ひしたくなって、手紙を書きました。快くひきうけてくださって届いたのがこの一文です。

赤間 記